

水稻新品種‘愛のゆめ’の育成

誌名	愛媛県農業試験場研究報告 = Bulletin of the Ehime Agricultural Experiment Station
ISSN	03887782
著者	兼頭, 明宏 秋山, 勉 池内, 浩樹 神坂, 英直
巻/号	38号
掲載ページ	p. 1-8
発行年月	2004年3月

水稲新品種 ‘愛のゆめ’ の育成

兼頭 明宏 ・ 秋山 勉 ・ 池内 浩樹* ・ 神坂 英直**

要 旨

1989年に愛媛県農業試験場において‘西海181号’と‘ヒノヒカリ’を交配し、その後代より‘愛のゆめ’を育成した。本品種は、愛媛県では中生の粳種である。稈長は中で草型は中間型である。葉いもち病にはやや弱、穂発芽性は難である。収量性は中程度であり、外観品質は良質で、食味は上中の特性を持つ。適地は県下の普通期栽培地帯である。

キーワード：水稲，育成，愛のゆめ，良食味，奨励品種

1. 緒 言

愛媛県における水稲奨励品種はうるち種で7品種，そのうち中生品種は1985年採用の‘コガネマサリ’，1991年採用の‘ひめのまい’と1996年採用の‘ヒノヒカリ’であった。‘コガネマサリ’，‘ひめのまい’は良質で栽培特性に優れ，両品種で1994年には最大5,120haの作付けがあった。しかし，良食味品種に対する消費者ニーズの高まる中で，近年では‘あきたこまち’，‘コシヒカリ’，‘ヒノヒカリ’等に栽培が集中し，‘コガネマサリ’や‘ひめのまい’の栽培面積は減少していた。一方，‘ヒノヒカリ’は県下の作付け面積第1位となり，食味評価は高いが，気象・栽培条件により検査等級が低下する場合は見られた。

‘愛のゆめ’はこのような背景の中で，中生の良質・良食味を目標に育成された新品種である。2002年に本県において奨励品種に採用され，‘コガネマサリ’，‘ひめのまい’に換えて，本県の普通期栽培地帯に普及することとなった。

‘愛のゆめ’は‘ヒノヒカリ’並の熟期で，品質が‘ヒノヒカリ’より優れる良質・良食味品種であることから，愛媛県における普通期水稲の品質及び食味の向上に寄与するものと考えられる。

2. 育種目標及び育成経過

‘愛のゆめ’は，図1に示したように，愛媛県農業試験場で中生良質・良食味品種の育成を目標として，早生・強稈で良質の‘西海181号’を母とし，中生・良食味の‘ヒノヒカリ’を父として人工交配した組み合わせに由来する。

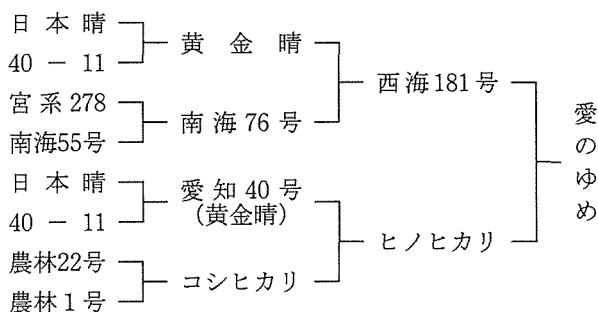


図1 ‘愛のゆめ’の系譜

選抜経過は表1に示したとおりである。1989年に交配，翌年雑種第1代を養成し，雑種第2代～4代は世代促進温室を利用して集団を養成した。雑種第5代において個体選抜を行い，以降系統育種法によって選抜固定を図った。1995年雑種第7代で‘媛系447’の系統番号を付し，生産力検定試験及び特性検定試験に供試した。良質良食味で有望と認められたので，1997年雑種第8代で‘媛育50号’の系統名をつけ，1997～2001年に奨励品種決定調査に供試した。また，1998～2001年に県下12ヶ所で現地調査を行い，地域適応性を検討した。

それらの成績が良好であったので，2002年1月に愛媛県の奨励品種に採用された。2001年で世代は雑種第13代である。

なお，2002年5月に種苗登録を出願し，現在出願中である。

3. 特 性

3.1 一般特性

奨励品種決定調査における成績を表2～3に，草姿を写真1に示した。

* 現愛媛県立農業大学校 ** 現株式会社つるい

水稻 '愛のゆめ' の育成

表1 選抜経過

年次	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
世代	交配	F 1	F 2	F 3・F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	F 9	F 10	F 11	F 12
系統群数							6	3	2	3	2	2
供試系統数					個体選抜	14	30	15	10	15	10	10
個体数					1,100							
選抜系統数					14	6	3	2	3	2	2	1
備考	89交16			世代促進			媛系447		媛育50号			

表2 形態的特性

品種名	葉色	止葉形状	ふ先色	脱粒性	稈		芒	
					剛柔	太細	多少	長短
愛のゆめ	中	立	黄白	難	や剛	中	稀	極短
ヒノヒカリ	中	や立	黄白	難	中	中	稀	極短
コガネマサリ	中	中	黄白	難	中	中～や太	やや少	やや短

表3 生育及び収量

品種名	施肥条件	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	倒伏程度	精玄米重	収量比	屑米重率
		月・日	月・日	cm	cm	本/m ²	0-5	kg/a	%	%
愛のゆめ		8.26	10.08	78	19.4	349	0.0	57.1	100	4.1
ヒノヒカリ	標肥栽培	8.27	10.08	83	19.6	352	0.4	57.3	100	5.6
コガネマサリ		8.25	10.05	84	21.1	326	0.3	58.4	102	3.9
愛のゆめ		8.26	10.10	81	19.6	363	0.1	59.6	100	3.9
ヒノヒカリ	多肥栽培	8.26	10.09	85	19.6	376	1.0	59.5	100	5.9
コガネマサリ		8.25	10.07	87	21.1	353	0.7	59.2	100	4.3

注) 奨励品種決定調査成績 標準栽培 (1997~2001年) 多肥栽培 (1998~2001年)
 移植時期 6月15日
 精玄米重は粒厚1.8mm以上, 屑米重率は粒厚1.8mm未満

'愛のゆめ' は 'ヒノヒカリ' に比べて出穂期, 成熟期共にほぼ同じで, 中生に属する。

稈長は 'ヒノヒカリ' に比較し, 5 cm程度短く中稈, 穂長は同程度の中である。穂数は同程度で, 草型は中間型に属する。登熟期の止葉は立ち草姿は良好である。稈の細太は中, 剛柔はやや剛であり, 耐倒伏性は 'ヒノヒカリ' より強くやや強である。1穂粗数は 'ヒノヒカリ' よりやや少なく, 粒着密度は中である。芒は稀に短芒を発生し, ふ先色と穎色は黄白で脱粒性は難である。

3.2 収量性及び登熟性

'愛のゆめ' の収量性は, 表3から明らかなように 'ヒノヒカリ' と同程度である。'ヒノヒカリ' に対する収量比較比率は, 標肥栽培では98~103%で平均は100%, 多肥栽培では96~102%で平均100%であった。また, 表4~5に示したように '愛のゆめ' は 'ヒノヒカリ' に比べ, 1穂における1次枝梗粗の割合が高く, 登熟歩合も高いこと, また, 屑米重率も低いことから登熟性は優れると推定される。

表4 登熟歩合と粗数

品種名	穂数 本/m ²	平均 1穂粗数	粗数 千粒/m ²	登熟歩合 %
愛のゆめ	372	85	31.5	84
ヒノヒカリ	347	94	32.7	80

注) 6月10日移植 1998~2000年の3年間の平均

表5 1次枝梗粗率

品種名	1穂粗数	1次枝梗 粗数	1次枝梗 粗数	1次枝梗 粗率(%)
愛のゆめ	76	50	26	66
ヒノヒカリ	82	51	31	62
コガネマサリ	88	49	39	56
松山三井	90	49	42	54
こいごころ	71	45	26	63

注) 1株の最長稈より5穂選び5株の25穂調査 (2000年)

3.3 病害抵抗性及び障害抵抗性

病害・障害抵抗性を調査した結果は表6～9に示したとおりであった。畑晩播における葉いもち病抵抗性検定ではやや弱で‘ヒノヒカリ’並であった。また、現地特性検定試験では、葉いもちはやや弱、穂いもちはやや弱～中、白葉枯病の圃場抵抗性は中であった。

穂発芽性は‘ヒノヒカリ’より易であるが、‘日本晴’より強く難である。

表6 耐病性

品種名	萎縮病	縞葉枯病	紋枯病	ごま葉枯病	葉いもち
愛のゆめ	無～微	無	微～少	無	5.3
ヒノヒカリ	無	無～微	微～少	無	5.1
コガネマサリ	無～微	無～微	微	無	4.0

注) 奨励品種決定調査成績 (1997～2001年)
 病害の発生：無～甚の6段階評価
 葉いもち検定：畑晩播圃場で検定
 発病程度は0 (発病無し)～10 (全葉枯死) の11段階評価

表7 いもち病圃場抵抗性検定試験 (現地)

品種名	葉いもち		穂いもち	
	1998年	1999年	1998年	1999年
愛のゆめ	3.63	0.00	0.50	0.11
コシヒカリ	3.26	0.00	4.67	0.08
日本晴	2.39	0.00	1.00	0.15
ヤマビコ	2.05	0.00	0.67	0.15
ヒノヒカリ	2.89	0.00	1.00	0.04
コガネマサリ	2.02	0.00	0.50	0.11

注) 調査基準 発病指数 0～10
 現地圃場 (三間町) における調査成績

表8 白葉枯病圃場抵抗性検定試験 (現地)

品種名	1998年	1999年
愛のゆめ	1.50	0.00
コシヒカリ	4.22	0.03
日本晴	1.89	0.15
ヤマビコ	4.78	0.82
ヒノヒカリ	1.33	0.00
コガネマサリ	3.78	0.18

注) 調査基準 発病指数 0～10
 現地圃場 (三間町) における調査成績

表9 穂発芽検定試験

品種名	4日目		7日目		穂発芽判定
	指数	判定	指数	判定	
愛のゆめ	7.1	難	7.1	難	難
ヒノヒカリ	1.4	極難	5.7	極難	極難
日本晴	17.1	中	25.7	易	中～易
黄金錦	18.6	中	42.9	極易	易
農林22号	51.4	極易	72.9	極易	極易

注) 2000年 高知農技センター 普通期栽培

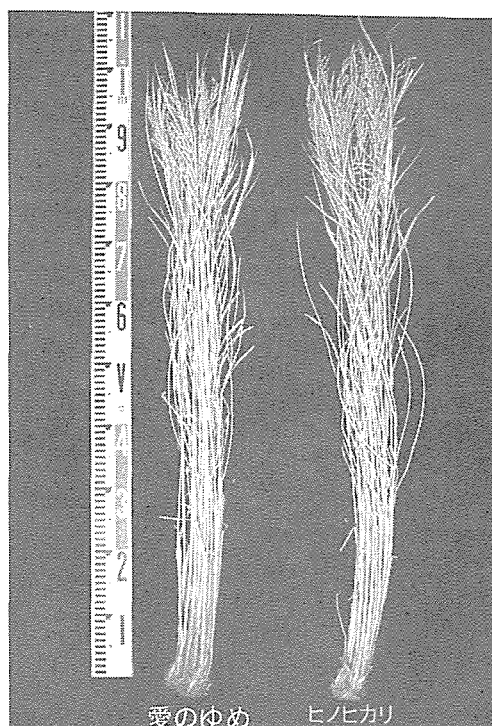


写真1 ‘愛のゆめ’の草姿

3.4 玄米形質及び食味

3.4.1 玄米形質

表10～11, 写真2に示したように, ‘愛のゆめ’は粳種に属し, 玄米の粒形, 粒大は中である。千粒重は23.2gで‘ヒノヒカリ’より0.8g程度重かった。粒厚分布は2.1～2.2mmにモードがあり, ‘ヒノヒカリ’に比べやや厚く分布していた。

玄米の外観品質は‘愛のゆめ’4.2, ‘ヒノヒカリ’4.9, 検査等級は‘愛のゆめ’1.1等, ‘ヒノヒカリ’1.5等, 米粒判別機を用いた良質粒歩合(4年平均)は‘愛のゆめ’90.0%, ‘ヒノヒカリ’84.0%であり, ‘愛のゆめ’は心白, 乳白, 腹白米の発生も少なく, ‘ヒノヒカリ’に優り, ‘コガネマサリ’並に極良質であった。

‘愛のゆめ’の一定搗精時間における搗精歩留及び白度は表12に見られるように, いずれも‘ヒノヒカリ’と同程度である。‘コガネマサリ’に比べると搗精歩留りは同程度で白度はやや高い。

3.4.2 食味及び化学特性

食味官能調査は, 当時職員により日本晴を基準(0)としてかなり悪い(-3)から, かなり良い(+3)の7段階評価で実施した。結果は表13に示したとおりである。‘愛のゆめ’の炊飯米は, 光沢があり粘りが強く, ‘日本晴’に対して, 総合評価では0.00～+1.00の値を示し, 明らかに勝った。10回の平均では‘愛のゆめ’+0.48, ‘ヒノヒカリ’+0.43で, 食味総合評価は‘ヒノヒカリ’並の上の中である。

水稻 '愛のゆめ' の育成

表14に示したように、玄米タンパク含有率は、標肥区では'ヒノヒカリ'に比べ僅かに低く、'コガネマサリ'より低い。また、多肥区では'ヒノヒカリ'、'コガネマサリ'に比べ低い値を示した。精米のアミロース含有率は19.2%で'ヒノヒカリ'より高く、'コガネマサリ'との中間の値を示した。

表10 玄米の品質及び形質

品種名	試験区	千粒重 g	容積重 g/l	外観 品質	検査 等級	良質粒 歩合%	玄米 形質						
							形	心白	乳白	腹白	光沢	胴割	色沢
愛のゆめ	標肥	23.2	840	4.2	1.1	90.0	中	微	無微	無	中～やや良	無	中
ヒノヒカリ	栽培	22.4	840	4.9	1.5	84.0	中	微少	無微	無	中	無微	中
コガネマサリ		23.0	836	4.3	1.3	88.2	中	無微	微	無微	中～やや良	無	中
愛のゆめ	多肥	23.6	850	4.5	1.0	88.6	中	無微	微	無	中～やや良	無	中
ヒノヒカリ	栽培	22.6	849	4.6	1.7	83.0	中	微	微少	無	中	無	中～やや濃
コガネマサリ		23.0	845	4.6	1.2	86.1	中	無微	無微	無微	中	無	中

注) 奨励品種決定調査成績 標肥栽培1997～2001年、多肥栽培1998～2001年の平均値で示した
 外観品種は1(上上)～9(下下)の9段階評価、数値が小さいほど高品質
 検査等級は高松食糧事務所松山事務所による判定
 良質粒歩合は静岡精機RS2000(米粒判別機)により玄米を測定

表11 粒厚分布

品種名	1.8mm～	1.9mm～	2.0mm～	2.1mm～	2.2mm以上
愛のゆめ	3.1	10.4	38.5	40.7	7.3
ヒノヒカリ	5.6	18.1	51.2	22.5	2.6
コシヒカリ	4.0	14.6	3.3	25.5	2.7
こいごころ	1.3	2.9	16.0	51.4	28.6
松山三井	5.3	16.1	49.3	26.2	3.2

注) 1.8mmグレーダーで選別後の精玄米について測定(200g, 6分間)
 単位は重量%
 1999年 移植時期試験 6月10日移植

表12 搗精歩留及び白度

品種名	試験区	搗精歩留(%)	白度
愛のゆめ	標肥	90.9	37.4
ヒノヒカリ	栽培	90.8	37.3
コガネマサリ		90.8	35.9
愛のゆめ	多肥	90.5	37.9
ヒノヒカリ	栽培	90.5	38.0
コガネマサリ		90.6	36.4

注) 搗精歩留はケットTP2型精米機により玄米100gを90秒搗精
 白度はケットC300型白度計による白米を測定
 標肥栽培は1998～2001年、多肥栽培は1999～2001年

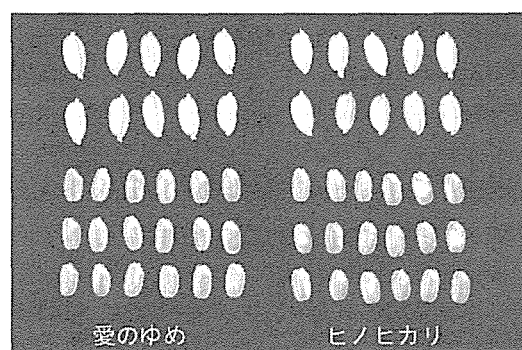


写真2 '愛のゆめ' 粉と玄

表13 食味官能試験

品種名	調査項目					
	総合	外観	香り	味	粘り	硬さ
愛のゆめ	0.00～1.00	0.04～1.07	-0.14～0.20	-0.14～0.67	0.00～0.74	-0.79～-0.04
平均	0.48	0.52	0.04	0.32	0.43	-0.34
ヒノヒカリ	-0.13～0.67	-0.06～0.81	0.00～0.47	-0.19～0.71	-0.13～0.53	-0.83～0.00
平均	0.43	0.53	0.18	0.39	0.34	-0.39

注) 調査は、1997年1回、1998～2000年は各3回の計10回実施。
 硬さは+が硬いことを示す。*は5%水準、**は1%水準で有意な差があることを示す。
 基準品種は'日本晴'

表14 タンパク含有率とアミロース含有率

品種名	タンパク含有率 %				アミロース含有率% (1997年)
	標肥栽培		多肥栽培		
	(1997~2000年)	平均	(1998~2000年)	平均	
愛のゆめ	7.7~7.8	7.8	8.1~8.2	8.1	19.2
ヒノヒカリ	7.8~8.0	7.9	8.2~8.6	8.4	18.1
コガネマサリ	8.2~8.5	8.4	8.7~9.3	8.9	20.2
松山三井	7.1~8.1	7.7	8.2~9.6	8.9	20.8
こいごころ	7.8~8.1	7.9	8.2~8.5	8.3	18.1

注) タンパク含有率はニレコ6500HONで玄米を測定, ゲルダール分析値との相関により補正
アミロース含有率はブランルーベオートアナライザーで精米を測定

4. 現地調査

4.1 調査方法

‘愛のゆめ’の県内各地への適応性を検討するために、1998~2001年の4カ年, ‘ヒノヒカリ’を対照品種として土居町など12カ所で奨励品種決定現地調査を実施した。調査場所及び栽培方法は表15のとおりである。

4.2 調査結果

現地調査の結果を、表16に示した。

‘愛のゆめ’の出穂期, 成熟期は‘ヒノヒカリ’に比較して, 同程度ないし1日遅い。稈長はやや短く, 穂長及び穂数は同程度である。精玄米重は‘ヒノヒカリ’に比べて, 広見町を除いた12カ所でやや多収の傾向が認められた。‘ヒノヒカリ’に対して, 千粒重は22.4gと0.5g重く, 良質粒歩合は3%程度高い。玄米タンパク質含有率は各地域で0.2%程度低い値となった。倒伏程度, 検査等級は‘ヒノヒカリ’と同程度であった。

4カ年の成績からは, 特に生育, 収量及び品質の点で問題となる地域は見られず, 移植時期も6月移植の普通期栽培で問題はないと考えられ, 本県における適応性が認められた。

表15 現地調査の場所及び栽培方法

実施場所	移植時期 月.日	栽植密度 株/m ²	施肥成分量 (kg/10a)		
			窒素	燐酸	加里
土居町	6.11	18.2	7.1	5.1	7.8
西条市	6.11	17.6	6.4	6.3	7.4
東予市	6.12	16.0	6.1	8.1	8.8
今治市	6.15	17.1	6.9	6.2	8.1
松山市	6.14	18.6	5.9	7.5	8.2
松前町	6.13	19.9	7.2	7.0	7.0
川内町	6.20	12.0	5.1	5.9	5.5
大洲市	6.13	16.4	3.8	4.9	5.1
宇和町	6.06	18.1	5.6	13.5	10.3
広見町	6.03	19.4	5.6	9.9	8.9
城川町	5.31	17.9	6.1	6.8	7.0
城辺町	5.25	17.9	4.8	4.3	5.8

注) 1997~2001年の平均値, 施肥成分量は, 土壌改良材の成分を含む
栽培方法はいずれも稚苗移植栽培

表16 現地調査における生育及び収量 (1998~2001年の平均)

場所	品種名	移植期 月.日	出穂期 月.日	成熟期 月.日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	倒伏	精玄米 重kg/a	収量比	千粒重 g	良質粒 割合%	検査 等級	玄米タン パク%
土居町	愛のゆめ	6.11	8.26	10.04	78	18.9	358	0.8	53.4	109	22.3	82.8	1.5	7.2
	対) ヒノヒカリ	6.11	8.26	10.05	83	18.9	357	1.1	49.1	100	22.2	78.8	1.5	7.7
西条市	愛のゆめ	6.11	8.27	10.02	82	18.5	408	0.4	50.0	104	21.6	83.0	1.3	8.0
	対) ヒノヒカリ	6.11	8.26	10.02	85	18.4	394	1.0	48.1	100	21.1	77.5	1.8	8.2
東予市	愛のゆめ	6.12	8.27	10.02	82	19.1	374	0.0	58.9	105	23.2	81.9	1.0	7.6
	対) ヒノヒカリ	6.12	8.27	10.03	84	18.8	364	0.0	56.1	100	22.2	82.2	1.1	7.8
今治市	愛のゆめ	6.15	8.29	10.06	81	19.8	352	0.7	53.3	116	22.5	85.2	1.5	7.6
	対) ヒノヒカリ	6.15	8.29	10.06	82	19.3	351	0.7	46.9	100	21.6	81.9	1.6	7.7
松山市	愛のゆめ	6.14	8.26	10.05	85	18.8	446	0.0	57.4	102	22.5	91.2	1.0	7.4
	対) ヒノヒカリ	6.14	8.26	10.04	86	18.9	409	0.0	56.5	100	22.5	87.5	1.0	7.6
松前町	愛のゆめ	6.13	8.28	10.08	79	18.4	426	0.0	53.3	104	21.9	90.0	1.1	7.4
	対) ヒノヒカリ	6.13	8.27	10.08	82	18.0	451	0.0	51.3	100	21.6	88.4	1.0	7.7
川内町	愛のゆめ	6.20	8.30	10.08	79	19.2	401	0.0	56.1	102	22.6	86.6	1.0	7.9
	対) ヒノヒカリ	6.20	8.29	10.07	81	19.1	385	0.0	54.8	100	22.0	83.1	1.1	8.1
大洲市	愛のゆめ	6.13	8.29	10.05	75	17.8	375	0.0	51.1	102	22.8	87.4	1.4	7.2
	対) ヒノヒカリ	6.13	8.29	10.07	78	17.5	378	0.6	50.2	100	22.3	83.0	1.3	7.4
宇和町	愛のゆめ	6.06	8.26	10.05	79	18.8	401	1.3	53.8	101	21.6	87.0	1.5	7.2
	対) ヒノヒカリ	6.06	8.25	10.04	82	18.7	399	1.1	53.4	100	21.3	83.5	1.8	7.5
広見町	愛のゆめ	6.03	8.23	10.03	82	18.2	398	0.5	57.2	97	22.9	86.5	1.3	7.0
	対) ヒノヒカリ	6.03	8.23	10.01	86	19.1	384	0.1	59.8	100	22.5	82.4	1.1	7.2
城川町	愛のゆめ	6.01	8.20	9.29	82	19.5	378	0.1	61.2	106	23.1	84.0	1.0	7.6
	対) ヒノヒカリ	6.01	8.20	9.28	86	18.8	365	0.4	57.7	100	22.5	81.0	1.0	7.6
城辺町	愛のゆめ	5.25	8.17	9.25	79	18.3	353	0.0	51.3	100	22.3	83.1	2.0	7.0
	対) ヒノヒカリ	5.25	8.18	9.26	81	18.7	357	0.0	51.2	100	21.6	81.9	2.1	7.1
対) ヒノヒカリ	愛のゆめ 平均	6.10	8.26	10.04	80	18.8	389	0.3	54.7	104	22.4	85.7	1.3	7.4
	対) ヒノヒカリ 平均	6.10	8.25	10.03	83	18.7	383	0.4	52.9	100	21.9	82.6	1.4	7.6

注) 玄米重, 千粒重は粒厚1.8mm以上, 検査等級は高松食糧事務所松山事務所調査, 倒伏は0(無)~甚5の6段階評価
良質粒歩合は静岡製機RS-2000で測定, 玄米タンパク含有率はニレコ6500HONで測定

5. 施肥試験

5.1 試験方法

施肥に対する‘愛のゆめ’の生育特性を検討するため、1998年に農業試験場内圃場において、対照品種に‘ヒノヒカリ’を用いて、普通期栽培（6月19日移植）で実施した。稚苗機械移植で栽植密度は17.5株/m²とした。試験区は基肥施肥量（N：P₂O₅：K₂Okg/10a）を4.0：3.2：4.0と8.0：6.4：8.0の2段階、穂肥（N：P₂O₅：K₂O：kg/10a）は0：0：0, 2.0：0.3：2.4, 4.0：0.6：4.9, 6.0：0.9：7.3Nkg/aの4段階を組み合わせる8試験区とし、1区20m²の2区制で試験を実施した。

5.2 試験結果

施肥量が収量・収量構成要素・品質に与える影響を調査した結果は図2～5に示したとおりである。

精玄米重についてみると、‘愛のゆめ’は施肥量の増大に伴って増加する傾向を示したが、‘ヒノヒカリ’は施肥量N 4～8 kg/10aの範囲では‘愛のゆめ’と同様であつ

たが、N 8～14kg/10aでは施肥量による差はなかった。その結果、施肥量N 4～8 kg/10aの少肥区では、‘愛のゆめ’と‘ヒノヒカリ’の間に差はなく、多肥区では‘愛のゆめ’がやや多収であった。

良質粒割合は、いずれの施肥量においても‘愛のゆめ’の方が‘ヒノヒカリ’より高く、前者は施肥量による良質粒割合の差が見られなかったのに対し、後者は施肥量の増大によって品質が低下する傾向があった。

‘ヒノヒカリ’は、施肥量の増大に伴ってm²当たり粒数が増加し、登熟歩合が低下する傾向を示したのに対し、‘愛のゆめ’は施肥量の増大による粒数の増加が少なく、登熟歩合の低下がほとんど見られなかった。

また、表17に示したように、検査等級は‘愛のゆめ’は施肥量による差が無く、いずれの施肥量においても良好であったのに対し、‘ヒノヒカリ’は施肥量の増加によって低下する傾向が認められた。

玄米のタンパク含有率は、いずれの施肥量においても‘愛のゆめ’の方が‘ヒノヒカリ’に比べて低い値を示した。

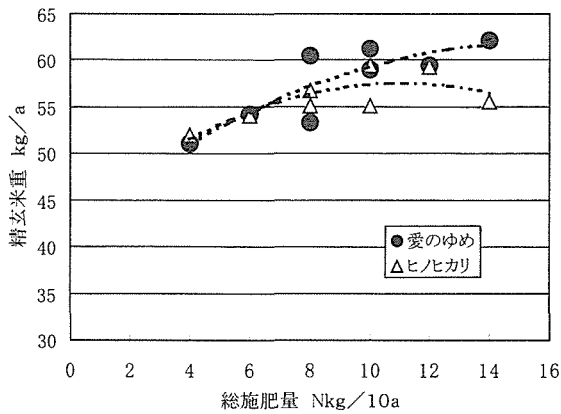


図2 施肥量と収量

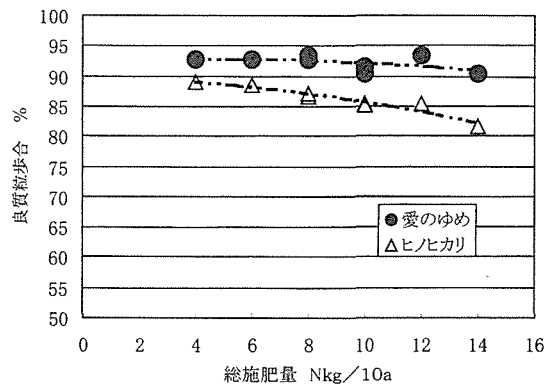


図3 施肥量と良質粒歩合

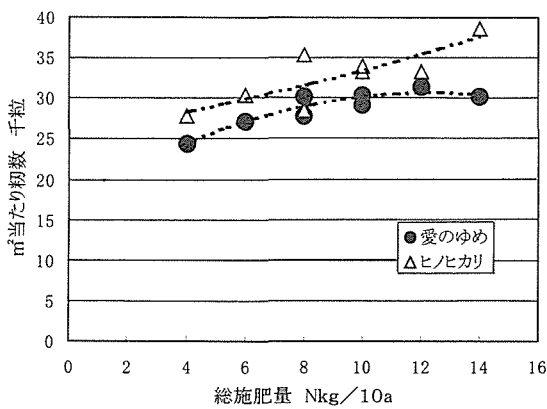


図4 施肥量とm²当たり粒数

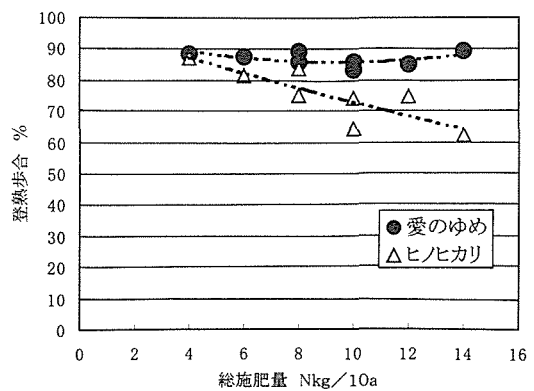


図5 施肥量と登熟歩合

表17 施肥量と生育及び品質

品種名	施肥方法 基肥-穂肥N	施肥量 合計 kg/10a	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	倒伏 程度 0-5	玄米 タ/100 %	検査 等級
愛のゆめ	4-0	4	74	17.8	365	0.0	7.0	1.0
	4-2	6	73	18.1	381	0.0	7.2	1.0
	4-4	8	77	18.6	402	0.0	7.7	1.0
	4-6	10	77	19.2	399	0.0	7.8	1.0
	8-0	8	78	18.0	378	0.0	7.2	1.0
	8-2	10	83	19.0	384	0.0	7.7	1.0
	8-4	12	82	18.9	382	0.0	7.8	1.0
	8-6	14	84	19.9	375	0.0	7.9	1.0
ヒノヒカリ	4-0	4	78	17.0	395	0.0	7.6	1.0
	4-2	6	77	17.5	395	0.0	7.3	1.0
	4-4	8	82	18.5	379	0.0	8.4	1.0
	4-6	10	83	19.3	389	0.0	8.3	1.0
	8-0	8	84	17.9	396	1.0	8.2	1.0
	8-2	10	87	19.0	373	1.5	8.6	2.0
	8-4	12	85	18.5	404	1.0	8.1	2.0
	8-6	14	87	19.6	385	1.0	8.9	2.0

注) 稚苗機械移植 6月19日移植 栽植密度 17.5株/m²

6. 適地及び栽培上の注意

適地は、図6に示したように愛媛県下の平坦地及び中山間地の普通期栽培である。

葉いもちにはやや弱であるので、多肥栽培は避けるとともに、適期除草に留意することが必要である。また、過剰分けつや登熟初期の高温による登熟阻害を避けるため、早植えは避け、田植時期は6月15～25日とする。‘ヒノヒカリ’よりやや粒厚が厚いので、良質の特性を生かすために、ライスグレーダーの篩目は1.85mmを用いる。

7. 命名の由来

愛媛県民が、夢を託せる品種に育って欲しいという願いを込めて、愛媛の“愛”と“ゆめ”をあわせて命名された。

8. 摘要

愛媛県に適した中生の良質良食味品種の育成に取り組み、1989年に交配した‘西海181号’／‘ヒノヒカリ’の後代から水稻新品種‘愛のゆめ’を育成し、2002年に愛媛県の奨励品種に採用された。

主な特性は次のとおりである。

- (1) 中生粳種である。
- (2) 中稈で、耐倒伏性はやや強である。草型は中間型である。
- (3) 葉いもちの圃場抵抗性はやや弱、白葉枯病抵抗性は中である。
- (4) 穂発芽性は難である。
- (5) 収量は中位である。
- (6) 玄米の粒大は中で、腹白・乳白・心白の発生は少なく品質・食味は良い。
- (7) 適地は県下の平坦地及び中山間地の普通期栽培である。

謝 辞

‘愛のゆめ’の育成に当たって、現地適応性及び特性の検討においては現地試験担当農家、農業改良普及センター、農業協同組合並びに農政事務所などの稲作関係各位からご協力を頂いた。ここに関係者各位に対して深甚の謝意を表す。

引用文献

兼頭明宏 (2001)：中生の水稻新品種‘愛のゆめ’，近畿中国四国地域における新技術1，23-25。

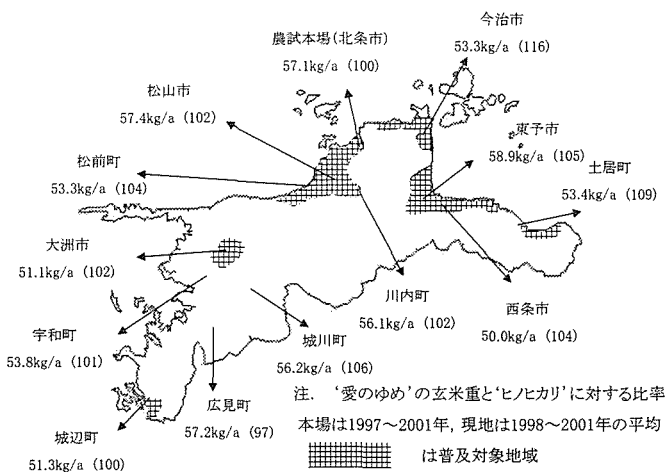


図6 県内における‘愛のゆめ’の収量性と主な普及対象地域

Breeding of New Rice Cultivar 'Ainoyume'

Kaneto Akihiro, Akiyama Tsutomu, Ikeuchi Hiroki and Kamisaka Hidenao

Abstract

A new rice cultivar 'Ainoyume' was bred from pedigrees of the cross between 'Saikai 181' and 'Hinohikari' at Ehime Agricultural Experiment Station and released as recommended variety in Ehime in 2002.

Characteristics of 'Ainoyume' are as follows,

- 1.It is a middle maturing and non-glutinous rice cultivar.
- 2.The culm length is medium. Lodging resistance is slightly strong. Plant type is intermediate.
- 3.Field resistance to blast is slightly weak. Field resistance to bacterial leaf blight is medium.
- 4.Viviparity is slight.
- 5.Yielding ability is medium.
- 6.Grain size is medium. Taste is good. Grain quality is high.
- 7.This new rice cultivar is adaptable at fertile areas in Ehime prefecture except highland.

Key words : paddy rice, breeding, Ainoyume, Eating quality, Recommended variety